[head](koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館[http://hjueda.on.coocan.jp//koten/koten.htm](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm)　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。  
  
堯曰第二十

１）堯曰咨爾舜天之曆數在爾躬允執其中四海困窮天祿永終舜亦以命禹曰予小子履敢用玄牡敢昭告于皇皇后帝有罪不敢赦帝臣不蔽簡在帝心朕躬有罪無以萬方萬方有罪罪在朕躬周有大賚善人是富雖有周親不如仁人百姓有過在予一人

yáo yuē zī ěr shùn tiān zhī lì shù zài ěr gōng yǔn zhí qí zhōng sì hǎi kùn qióng tiān lù yǒng zhōng shùn yì yǐ mìng yǔ yuē yǔ xiǎo zǐ lǚ gǎn yòng xuán mǔ gǎn zhāo gào yú huáng huáng hòu dì yǒu zuì bù gǎn shè dì chén bú bì jiǎn zài dì xīn zhèn gōng yǒu zuì wú yǐ wàn fāng wàn fāng yǒu zuì zuì zài zhèn gōng zhōu yǒu dà lài shàn rén shì fù wǔ wáng yuē suī yǒu zhōu qīn bù rú rén rén bǎi xìng yǒu guò zài yǔ yī rén  
堯の曰はく、咨（ああ）爾舜、天之曆數爾が躬に在り。允（まこと）に其の中を執れ。四海困窮せば天祿永く終へん。舜も亦以て禹に命す。曰はく、予れ小子、履（り）。敢へて玄牡（げんぼ）を用ゐて、敢て昭（あきら）かに皇皇（こうこう）たる后帝（こうてい）に告（こく）す。罪有らば敢て赦（ゆる）さず、帝臣蔽（かく）さず。簡（えらぶ）こと帝の心に在り。朕が躬罪有らば、萬方（ばんほう）を以てすること無かれ。萬方に罪有らば、罪は朕が躬に在り。周に大いなる賚（たまもの）有り。善人是れ富めり。周親有りと雖も、仁人に如（し）かず。百姓（ひゃくせい）過（あや）まち有らば、予一人に在り。  
  
堯の曰はく、咨(ああ)爾、舜よ。天の曆數は爾の躬に在り（爾が帝となる時が来た）。允に其の中を執れ(爾が時を授けよ)さもなくば、四海困窮（地の果てまで民は困窮し）天祿永終（天の賜ふ恵みは永遠に尽きよう）  
■　堯　書経、[堯典](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/yao1.htm#Ｙａｏ)に、「放たれる勳は欽（つつし）みて明らかにして、文思（もの考え方は）安安（やすらか）にして、允（まこと）に恭しく克（よ）く讓る。（その光）は四表（東西南北すべての地表）を被（おほ）ひ、上下（天上天下に）格（いた）る。克く明（公平）にして俊德、以て九族親しみ、九族旣に睦みて、百姓（の役割を）平章（公平に章らかにし）、百姓が昭明にして、萬邦は協和し、黎民（姓の無い民）變（事）に於て、時（いつも）雍（やわら）ぐ。乃ち羲･和（時を管理する二人の官）に命じ、欽みて昊（おほひなる）天に若（したが）ひ、日月星辰を曆象（天文観測をしてその運行を数値にあらわす）し、敬しみて人に時（四季）を授けしむ。」とあり、太陽のごとく公平に見聞きし、人びとの役割を定め、四季の運行を取り戻し、安らかな生活をもたらした王とされる。■　咨爾舜zī ěr shùn、ああ、なんじ、舜よ。愛情をこめた厳粛な呼びかけ、と吉川先生。■　書経、[舜典](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/shun.htm)に、「受終于文祖」とある。文祖、堯の始祖の廟において、終を受ける。堯の帝位の終わりを受ける、また、歴数を受ける。■　天之曆數　何晏曰く、「曆數は列次を謂ふなり。」、朱子之に因りて曰く、「帝王相ひ継ぐの次第、猶歳時節気の先後のごときなり」と。仁斎曰く、「曆數とは、歳時節気を紀（しる）して以て民に時を授くる者なり。爾の躬に在りは、天地の道を財成輔相する（易、泰卦象傳）を謂ふなり。『書』にいはゆる「天工人其れ之れに代る」（皐陶謨篇）是れなり」と。古書は誠に艱奥（かんあう）なり。然れども二説みな謎の如し、と徂徠先生。帝王の交替は、すべて天命によるものであり、交替の序列の表は天に存在する。かく、天の保管する帝王交替の序列の表、が古注の説、と吉川先生。書経、堯典の背景には、十個の太陽が一度に出たため、四季の運行が狂い農業不能に陥り、人を食う猰貐、鑿齒、封豨、脩蛇といった怪獣や九首の水火の怪九嬰、大風の災厄に悩み、堯は弓矢の名手羿を用いて九日を射落し、その他の厄介者を射殺しあるいは剣で斬り刻み、生け捕りにし退治することができた。その勲は萬民の知るところであり堯を天子となした（淮南子　本経訓）、といふ事情があった。■　允執其中四海困窮天祿永終　中を中庸、誠実に中庸の道をにぎって、政治を行え。そうしたならば、四もの海のはてまでをも困（きわ）め窮（つ）くして、天から与えられた幸福すなわち「禄」が永遠に続くであろう、といふのが古注。新注は、もし政治が常道をはずれ、四海のひとが困窮困難をしたならば、せっかく天から与えられた幸福も永遠に絶滅終熄するであろう、と吉川先生。古先聖王欽（つつし）みて昊天（かうてん）に若（したが）ひて以て民に臨む。上に天あり、下に民あり。しかうして天子その中間に立ち、その枢柄（すうへい）を握る。是れいはゆる皇極なり。ゆゑに古へ帝位を踐むを謂ひて「其の中を執る」と為すのみ、と徂徠先生。中とは仲で四仲とは春分、秋分、夏至、冬至。殷で、中を立つ、とは観測用の旗竿を立てること。その元に竹の簡（ふだ）のめどき、筮竹（ぜいちく）が置かれ、天体の運行がこれに記録される。これを天の歴数という。この中を執行しなく、時の管理が行はれなくなれば、四海（地の果て）のものまで皆困窮し、天の禄（賜）、永遠に尽きる。時、季節の管理が混乱すれば、農作業のみならず、すべての祭祀、行事が混乱を来たす。堯は、また、飢えている人がいれば、わたしのせいで飢えている、寒さにふるえる人がいれば、わたしのせいで着るものがない、罪を犯すものがあれば、そのものを犯罪に追いやったのはわたしだと考える帝とも評される。■　[舜典](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/shun.htm)によれば、（舜の）父は頑（かたくな）母（後妻）は囂（腹黒く）象（連れ子の名）は傲（おごる）。克（よ）く諧（和合）し孝を以て烝烝（ひたすら仕へた）。乂（我が身を修め）不格姦（不正を行はず）。帝（堯）の曰はく、我れ其（舜）を試めさむ。時に（舜に）女（めあは）しむ。厥（そ）の二女（堯の二人の娘、娥皇と女英）に刑（幸）するを觀る。二女を嬀汭 （舜のいる嬀水の洲）に釐（賜ひ）降し虞（舜）に嬪（婦）とす。帝の曰はく、欽（つつ）しめるかな。愼しみて五典（父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝）を徽（しるべ）とし、五典克く從ひ、百揆に納れ（百官に適材を得る）、百揆時に敍（さず）く（百官が叙される）。頑父、囂母、傲弟、二人の妻に舜の示した超人的な孝にして、はじめて百官に適材を得ることができた。

舜はまたそのことを禹に命（みことのり）す。  
■　堯典によれば、丘陵、山を越えて天に溢れ出る洪水を治めるために、鯀（禹の父）が登用され、鯀は民の苦しみを救うために、土を産み出す帝の息壌を盗み、これが露見して殺される。鯀は死んで三年腐らず、腹に禹を宿し、禹が産まれた後、化して黄竜となった。禹が、民を洪水から救うことに成功する。荘子は、「禹は偏枯なり。」という。列子は、禹が治水の苦労で身体がすりへり、手足がたこだらけであった。という。■　書経、禹貢に曰く、「禹、土を數（し）き、山を随（こぼ）ち木を刊（き）り高山大川を奠（さだ）む。」洪水から全土を回復せしめた功をもって禹が帝位を継ぐ。堯、舜、禹までは帝に相応しい人物に帝位を授けた。しかし、禹はその子、啓に帝位を継がせ、平成の世の積算では、夏は17代約440年（BC2070～：宋の皇極経世書、資治通鑑前編ではBC2265年）王朝を営むが、桀の時、湯に討たれるが、湯も子の大丁に帝位を継がせ、30代約640年（BC1765～：宋の皇極経世書、資治通鑑前編ではBC1746年）後の紂の時に、周の武帝に討たれる。この循環の基を造ったのが禹。しかし、王朝は永遠に命脈を保つことはできず、自壊し、新たに命を受けた者が新王朝を開く。しかし、徳ではなく武力で政権を奪取する現実は、非は前王朝にありと雖も暴力革命であり、悩ましいものがあった。湯の悩みをみてみよう。

曰く、予（われ）小子、履（湯の名）、敢へて玄（夏の色）牡を用ゐて祭り、敢へて昭らかに皇皇たる后帝にお伺い申し上げます。もし桀を討ったことに罪が有るなら、敢へてお赦しいただくことはありません。帝の臣を蔽（かく）すことはございません。簡ぶことは帝の心に在ります。朕（わ）が躬に罪が有るのであれば、萬方の民に罪が及びませぬように。もし萬方の民に罪が有るなら、その罪は朕が躬に在るからです。  
  
■　予は一人称、小子はささやかなるもの、履は湯王の名。玄は夏、白が殷、赤が周の色。玄牡を用ひるとは、湯王が桀を討ったものの、敢へて夏の礼を以て祭祀を行った、夏の家臣として帝を祭ったことになる。■　昭とは、桀を討ったのは他でもない、あきらかに小子、履であること。皇とは“おほいなる”、皇皇は、まことにおほいなる、后も帝も、上帝、天帝のこと。かつて、天と地の通行は保たれていたが、蚩尤と黄帝の戦いは、風伯、雨師、銅頭鉄額の蚩尤の兄弟、苗民、魑魅魍魎、夸父族（巨人族）対四方の鬼神、応竜、魃、諸侯、熊豹虎類の獣であった。神から人まで入り乱れての総力戦であり、天界と地上界がしっちゃかめっちゃかになった。帝は「重」に天を司らせ、「黎」に地を司らせ、天地の通行を遮断し、この混乱を収めた。■　有罪不敢赦　暴君と称される桀を討つ、民を困窮から救ふためであるが、武力で打倒したことに罪があるのであれば、赦していただくことはない。こう祭祀で公言することで、その正当性を確立せんとする。■　帝臣不蔽　帝臣とは桀とする説（古注）と湯を含むとする説（新注）があるとされる。展開からすれば、桀であれ、湯であれ、罪からは逃げ隠れできない。■　簡在帝心　簡は閲（しらべる、あらためる）、帝の心によって点検される。■　朕躬有罪無以萬方萬方有罪罪在朕躬　桀を討って欲しいという民の声があった。しかし、討ったのは湯、私の意志であり、罪があるならば、万邦の民ではなく私にある。こう宣言することで、その正当性を民に示し、民の困窮救済、民生の安定を政権の基盤に据えた。もし、それが行はれないとすれば、その罪を負はねばならい。それが子孫への戒めであった。そして、政権の正当性に自らを天帝の命を受ける帝の嫡男、地上の帝とする世襲政権のイデオロギーを生み出した。30代約640年存続させる強烈な使命感があったといふものも、永続することはなかった。これは周も同じであり、武王が悩みとしたことであり、それを実現するために弟の旦（周公）が湯の役割を担った。

読書会[2010年7月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年7月3日)、[2010年7月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年7月10日)  
  
周に（天は）賚をもたらされた。善人が富（おほ）く、周親がいても、仁人には如かず（と抜擢された。）百姓（百官）に過ちあるは、予一人に在り（と自省された）。

■　周有大賚善人是富　賚は賜、大賚とあり、天の賜。何晏は、「言ふは周家　天の大賜を受け、善人に富む。亂臣十人あり」とする。富は多いこととみている。「武王曰はく、予に亂（おさ）むる臣十人有り（[泰伯篇20](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taihaku.htm)）」。集註は、「賚は來代の反。此以下は武王の事を述ぶ。賚は予なり。武王商を克ち、四海に大いに賚す。周書武成篇に見ゆ。此れ其の富める所の者は皆善人なるを言う。詩の序に云う、賚は、善人に錫予する所以なり、と。蓋し此に本づかん。」周がおおいなる賚を四海の民にもたらしたとする。周書武成篇は偽作とされるが、善人が多く居り、亂臣十人とは、太公望（師）・周公旦（輔）･召公奭（右師〔軍〕）･畢公（左師〔軍〕）･榮公（？）･大顚･閎夭･散宜生･南宮适（この四人は文王の四友、文王が紂王によって羑里に捕らえられたとき、美女や駿馬を献上して助けた）、文母（文王の妻）とされる。旦と文母は肉親だがそれ以外を、大賚、善人とみるのであろう。■　雖有周親不如仁人　周を国名とみる説と「至」、至親、近い肉親とみる説がある。孔安國は、肉親の菅叔、蔡叔を誅し、箕子、微子を用いたことと解した。周に親有りと雖もの方向。集註は、箕子、微子よりも亂臣十人を想定しており、「紂は至親多しといへども、周家の仁人多きに如かず」と解している。■　百姓有過在予一人　湯の言葉と似た戒めの言葉である。天意にて周には善人が多い。親族（あるいは至親）が居るとしても、仁人を適所に用いよ。もし百官に過ちあれば、それは私の責任である、といふのが論語の論調となろう。■　しかし、書経、泰誓中は、「天其れ予を以て民を乂（おさ）めしむ。朕が夢、朕の卜に協（かな）ひ、休祥を襲（かさ）ぬ。商を戎（じゅう）せば必ず克（か）たん。受（紂）億兆の夷人有るも、離心離德たり。予亂臣十人有りて、同心同德たり。周親有りと雖も、仁人に如かず。天の視るは我が民に自（よ）り視る、天の聽くは我が民に自（よ）り聽く。百姓過ち有らば、予一人に在り。」とする。これは、天が夏の桀を殷の湯に討たしたごとく、殷の紂を武王に討たせる命を下したもので、そのことについてもし過ちが有ればそれは武王一人にあると諸侯に告げたものとなり、論語の論調とは異なってくる。天意にあらずしてもし過ちを犯したのであれば、その罪は私にあるという敬虔な自省の心ではない。この差異を検証することから、書経、泰誓（上中下）三篇は、論語や左伝や孟子や墨子等々、書経の他篇の言辞を基に、戦国時代の論調で、偽作されたとみなされた。  
孔子は、当時においてすでに意味が分かりにくくなっていた、「詩」や「易」と同じく「尚書」に孔子風の解釈を施し、弟子に教えたと思はれ、その一端がここにみえるのかもしれない。その難解な説明を省き、当時の状況に応じて、当時の言葉でその要諦を示したものが、以下におかれたと考えてみた。

読書会：[2010年7月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年7月25日)

２）謹權量審法度修廢官四方之政行焉興滅國繼絶世舉逸民天下之民歸心焉所重民食喪祭

jǐn quán liàng shěn fǎ dù xiū fèi guān sì fāng zhī zhèng xíng yān xīng miè guó jì jué shì jǔ yì mín tiān xià zhī mín guī xīn yān suǒ zhòng mín shí sāng jì  
權量を謹み法度を審にし、廢れたる官を修むれば、四方の政行はる。滅びたる國を興し、絶へたる世を繼き、逸民を舉ぐれば、天下の民心を歸す。民に重ずる所は食、喪、祭。  
  
權量を公平にし、法度を詳しく明らかにし、廢れた官を修復すれば、四方の政も行はれるようになる。滅びた國を興し、絕へた世を繼がしめ、逸民を舉げるなら、天下の民は心を歸す。重ずる所は、民、食、喪、祭である。  
■　權は「重さ」をはかり、量はますめ、「量」をはかること。謹むとは、公正にすること。税収には大きな權量を用ゐ、支出には小さな權量を用ゐることが行はれた。■　法度は法律、規則、法はのり、手本とするもの、度は「長さを」はかること、長短をはかりそろえる基準のこと、審は詳しく明らかにする。誰が聞いても、見ても分かるものとする。■　上にみたように、天地が通じていた頃、神人怪異入り乱れて、天上天下に大騒乱が起こり、帝が重黎に命じて、天地をへだてさせたという。以降、旱魃、洪水に苦しみ、天官の職（天文観測をして暦をただすこと）も廃れ、暦も合わなくなってしまっていた。堯はこの廃れた官に羲和を命じた。王朝にあって暦を正し、四季の運行と合致させることは、謹權量に勝るとも劣らぬ仕事である。必要であるが廢れた官を修復し、王朝の政がただされれば、四方の政治も行はれる。■　興滅國繼絶世舉逸民は微子を念頭に置いている。周の武王は滅びた殷を宋として興し、逸民であった微子に宋国を任せた。滅ぼされた国の民であっても、抜擢されるとなれば、天下の民、その心はその王に歸す。繼絶世は黄帝、堯や舜等々の子孫も対象であり、逸民には伯夷・叔斉なども視野に入る。■　所重民食喪祭は所民重、食喪祭（新注）と、所重、民食喪祭（古注）の二説がある。前者の場合には、天下之民歸心をうけ、その民の心とは、食喪祭となる。偽古文尚書武成篇では、「重民五教、惟食喪祭」とあり、朱子の考えに合致する、と吉川先生。食は分かるが、喪、祭となれば、士以上のことで、喪はいいが、民に祭には違和感がある。後者の場合には、王の心得の一貫として、つづいて重んじることは、民食喪祭となる。この句の全体の趣旨からすれば、後者の方が通りがいい。ただ、孔安国が、民は国の本、食は民の命、喪は哀を尽くす、祭は敬を致す、としており、喪＝哀、祭＝敬といふことなら、朱子の解釈でいいのかもしれないが、祭は郊での天帝の祭祀、宗廟における祖霊の祭祀、社稷の祭祀が根本にあり、上が正しい喪葬、祭祀を行ふことが政を正しくし、世の安定をもたらし、民心を安んじるという流れを優先すべきかと思ふ。  
読書会：[2010年7月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年7月25日)

３）寬則得眾信則民任焉敏則有功公則說

kuān zé dé zhòng xìn zé mín rèn yān mǐn zé yǒu gōng gōng zé yuè  
寬なれば則ち眾を得。信なれば則ち民任ず。敏なれば則ち功有り。公なれば則ち說ぶ。  
  
寬容であれば眾を得る、信用があれば民が任ず。敏であれば功があり、公であれば說ぶ。  
■　[陽貨篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoka.doc)）に、「恭ならば則ち侮らず。寬ならば則ち眾を得る。信ならば則ち人任す。敏ならば則ち功有り。惠ならば則ち以て人を使ふに足る。」とあった。孔子が子張の仁に対する問ひに応へたものである。仁斎は公は惠の間違ひとする。公というのは宋儒が「天理の公（おおやけ」として儒学の要諦とするが、論語に公は出て来ず、公は無差別を意味する老荘の用語であり、秩序を重んじる儒学の用語ではないとする、と吉川先生。徂徠は、「偏無く黨無し（書、洪範）」、「民の好む所は之を好み、民の悪む所は之を悪む（禮記、大学篇）」、あに公に非ず乎、宋儒も仁斎もゆき過ぎとする。堯の事績からすれば、「光は四表を被ひ、上下に格（いた）り、俊なる徳を克く明らかにし、九族既に睦（むつ）み、百姓（諸々の氏族の役割を）を平章（公平にあきらかに）す。」公則說は十分成り立つ。  
読書会：[2010年7月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年7月25日)

４）子張問於孔子曰何如斯可以從政矣子曰尊五美屏四惡斯可以從政矣子張曰何謂五美子曰君子惠而不費勞而不怨欲而不貪泰而不驕威而不猛子張曰何謂惠而不費子曰因民之所利而利之斯不亦惠而不費乎擇可勞而勞之又誰怨欲仁而得仁又焉貪君子無眾寡無小大無敢慢斯不亦泰而不驕乎君子正其衣冠尊其瞻視儼然人望而畏之斯不亦威而不猛乎子張曰何謂四惡子曰不教而殺謂之虐不戒視成謂之暴慢令致期謂之賊猶之與人也出納之吝謂之有司

zǐ zhāng wèn yú kǒng zǐ yuē hé rú sī kě yǐ cóng zhèng yǐ zǐ yuē zūn wǔ měi bìng sì è sī kě yǐ cóng zhèng yǐ zǐ zhāng yuē hé wèi wǔ měi zǐ yuē jūn zǐ huì ér bú fèi láo érbú yuàn yù ér bù tān tài ér bù jiāo wēi ér bù měng zǐ zhāng yuē hé wèi huì ér bú fèi zǐ yuē yīn mín zhī suǒ lì ér lì zhī sī bú yì huì ér bú fèi hū zé kě láo ér láo zhī yòu shuí yuàn yù rén ér dé rén yòu yān tān jūn zǐ wú zhòng guǎ wú xiǎo dà wú gǎn màn sī bú yì tài ér bù jiāo hū jūn zǐ zhèng qí yī guān zūn qí zhān shì yǎn rán rén wàng ér wèi zhī sī bú yì wēi ér bù měng hū zǐ zhāng yuē hé wèi sì è zǐ yuē bú jiào ér shā wèi zhī nüè bú jiè shì chéng wèizhī bào màn lìng zhì qī wèi zhī zéi yóu zhī yǔ rén yě chū nà zhī yǒu sī wèi zhī lìn  
子張、孔子に問ひて曰く、何如なる斯れ以て政に從ふ可き。子の曰はく、五美を尊び四惡を屏（しりぞ）けて、斯れ以て政に從ふ可し。子張が曰く、何をか五美と謂ふ。子の曰はく、君子は惠して費（つひ）へず。勞（らう）して怨（うら）みず。欲して貪（むさぼ）らず。泰（ゆたか）にして驕（おご）らず。威（ゐ）にして猛（たけ）からず。子張が曰く、何をか惠して費へずと謂ふ。子の曰はく、民の利する所に因りてこれを利す。斯れ亦た惠して費へざるにあらずや。勞す可きを擇（えら）んでこれを勞す、又誰をか怨ん。仁を欲して仁を得たり、又焉ぞ貪らん。君子は眾寡と無く、小大と無く、敢へて斯を慢（あなど）ること無し。亦泰にして驕らざるにあらずや。君子は其の衣冠を正くして、其の瞻視（せんし）を尊（たか）くし、儼然（げんぜん）として人望みてこれを畏る。斯れ亦た威にして猛からざるにあらずや。子張が曰く、何をか四惡と謂ふ。子の曰はく、教へずして殺す、これを虐（ぎゃく）と謂ふ。戒ずして成（せい）を視る、これを暴と謂ふ。令を慢（ゆるく）くして期を致す、これを賊と謂ふ。これを猶（ひと）しく人に與ふ。出納の吝（やぶさか）なる、これを有司と謂ふ。  
  
子張が孔子に、どうすれば政治を行ふことができるでしょうか、と尋ねると、先生は、五美を尊び、四惡を屏（しりぞ）けば、政治を行ふことができる、と申された。子張が五美とはどういうふことですか、尋ねると、先生こう申された。君子は民に惠むが民に費すことなく、民を勞すが民が怨むことなく、自ら欲すが貪ることなく、泰（ゆたか）であるが驕ることなく、威あるが猛々しくない。子張が、惠むが費さないとはどういうことですかと云うと、先生はこう申された。民が利とする所に因って民を利すことができれば、惠むが民に費すことないとならないか。民が勞す可きを擇んで勞す（働くべきことを働く）なら誰が怨もう。己が仁を欲して仁を得るとなれば、又どうして貪ることがあろうか。君子には眾寡（多少）も無ければ、小大も無い。だから敢へて慢ることも無い。亦、泰かにして驕らないのではないか。君子は其の衣冠を正しく着用し、其の瞻視（目線）を尊（たか）くし、儼然として人が望み畏れる。斯れ亦、威があって猛々しくないのでないか。子張がでは四惡とはどういふことですかと云ふと、先生はこう申された。教へないでおいて殺す、これを虐と謂ふ。戒しめずして成を視る、これを暴と謂ふ。令を慢くして期を致す、これを賊と謂ふ。猶（ひとしく）与えるべきであるのに出納をけちる（大きな枡目で取り立て、小さな枡目で支給する）、これを有司と謂ふ。  
  
■　何如なることか、可以はできること。從政は古語で、政治に参与すること、為政者として政治を行ふこと。■　尊五美屏四惡、屏は隠れる、逃れる、そのことにより身を守ること。四惡を遮断して身をまもること。“しりぞく”と訓じている。■　徂徠は、仁斎曰く、「惠すれば費やし易く、勞すれば怨み易く、欲すれば貪り易く、泰なれば驕り易く、威なれば猛なり易し。而（しか）も今みな然らず。ゆゑに以て美と為すなり、と。之を得たり。又曰く、惠而不費、勞而不怨、二者は民を治むるの要。欲而不貪、泰而不驕、威而不猛、三者は身を修むるの要。身を修むるは即ち民を治むるの本、と。亦た之を得たり。ただし、徂徠は、欲仁而得仁も亦、民を治むるの要とする。政治における五つの美と孔子が言ったといふ。■　吉川先生は、人民の利益とする所に因って利益を与えてやる。費用のかからぬ恩恵である。労働させてもよい人間を選択して労働させる。怨みはおこらない。欲望を仁の方向に向かってはたらかせ、仁を獲得する。貫禄はあるが傲慢でない（子路篇）。相手の衆寡大小は無視して、どれに対しても、慢（あなど）る気もちがない。威あって猛からず。この表現も述而篇に、孔子の性格として見えるが、ここの説明では、むしろ容貌姿態である。其の衣冠を正しくし、其の瞻視を尊くし、瞻も見ることである。儼然人望んで之を畏る。子張篇の之を望めば儼然のいいかえであろう、とされる。孔子は為政者の資質として、惠、勞、欲、泰、威が必要であるが、美しくなければならないとした。その危険な側面は仁斎が語る通りである。民の利とする所とは安心して暮らせる世である。それは政治の土台が、謹權量審法度、公則説であり、重税や戦役のないことであり、衣食住が満たされることである。そういう政治を行ふことで、物を恵むことではない。民にはそれぞれの暮らしを成り立たせる生業がある。それを励まし、よりよい生活ができるようにするなら、どうして働くことに怨みを抱くことがあろう。伯夷と叔斉は仁を欲して仁を得た、彼等が貪るようなことをしたであろうか、政の最上は仁を為すにある。泰であるとは、持てる者、力ある者を尊重することでなく、持たざる者、弱き者、いづれにも慢ることなく対応できることではないか。その際には、衣服や冠をきちんと正しく着用し、目を伏せたり、きょろきょろ見回したりせず、目線を高く、公正に見る。嘘、ごまかしは効かないと、まともになるであろう。脅したりすかしたり力ずくで行ふべきものではなかろう。■　四惡　吉川先生は、1、教育を施していないのに、悪いことをしたといって殺す、それが虐。2、あらかじめ通告しておかずに、仕事のできあがりをみせろという、それが暴。3、命令を、いい加減に、実行の意志もなく出しておきながら、期限を切る。それが賊。4、之を猶（ひと）しく人に与うる也、どちらにしても結局は同じように人にやるのに、出し入れをしぶること。それを有司、小役人根性という、とされる。徂徠は以下のごとく述べる。不戒視成、馬融曰く、「宿（あらか）じめ戒めずして目前の成を責むるを成を視ると為す。」と。けだし他を是れ視ずして唯だ成を是れ視る、ゆゑに「成を視る」と曰ふ。或ひは成を督すといふを以て之を解す（仁斎）。「視」に督の義あらん乎。慢令致期、孔安國曰く、「民と信なくして虚しく期を刻す」と。虚の字は解すべからず。朱子曰く、「期を致すとは期を刻するなり。賊とは切害の意。前に緩にして後に急にし、以てその民を誤らしめて必ずこれを刑す。是れ之れを賊害するなり」と。期を刻すとは期を約するなり。而れども止（た）だ「期を致すとは期を刻するなり」と言ふのみならば、則ち致字の義なし。けだし「慢」とは怠慢なり。「令」とは、三令五申（史記、孫武傳）の令の如し、その之れを令申するゆゑんの者勤めずして、民をしてその事に怠り、覚えず期に逼（せま）らしむ。是れ故（ことさ）らに民を刑に陥るの意あり。ゆゑに之を「賊」と謂ふ。「致」とは、至ら使むるを謂ふなり。不戒視成が如きは、則ち絶えて告戒の事なし。況や令申するをや。唯だその成を視るのみ。是れその意を暴悪と為す。ゆゑにこれを「暴」と謂ふ。孔子は政治における四つの悪を、虐、暴、賊、有司とした。虐とは虎が爪をあらわにしているさま、虎について何も教えずそこに至らしめて殺す、政治の権力について何も教えず、政治に巻き込んで殺す。なんと無残ではないか。暴とは日照りに曝（さら）す、暴虐とは虐にさらすこと、暴走はにわかで、疾（はや）く、あらあらしい。戒とは両手に斤（おの）をもつさま、警戒することから、戒告すること。間違っていること、危うきことに警告をせずして、いきなり責任を追及する。いかにも陥れるがごとき、なんとむくつけきで無道ではないか。賊とは、鼎(貝)と戎からなり、鼎には盟約が刻されており、戈でけずりとる、盟約を破棄し相手を窮地に陥れることから、人を賊害することに用いられる。慢令となれば人は形式だけのことかと油断する、期日となったとたんに取り立て、応じぬと引っ立て、牢獄に入れる、なんと騙し討ちではないか。有司は司（限られた職掌）を有（も）つ役人、人君や宰相のごとく全体を管掌するものではない。猶之與人也は、均しく人に与えるべきものと解されている。税収には大きな權量を用ゐ、支出には小さな權量を用ゐるとあった。吝とはこのことを指し、その残りで私腹を肥やす。有司の手口であった。中国では抜けきれぬ役人の汚職の構造があった。政治の現実が四悪に近く、これに対するものが五美であろうが、現実離れしている。それを今の為政者に期待するのは到底困難、だからこそ政治が乱れている。若い子張がどう思ったことか。それでも尚、それを成し遂げむとするのが孔子であり、以下、最後にそれで締めくくった。

読書会：[2010年8月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年８月７日)

５）子曰不知命無以為君子也不知禮無以立也不知言無以知人也

zǐ yuē bù zhī mìng wú yǐ wéi jūn zǐ yě bù zhī lǐ wú yǐ lì yě bù zhī yán wú yǐ zhī rén yě  
子の曰はく、命を知らずんば以て君子為る無し。禮を知らずんば以て立つこと無し。言を知らずんば以て人を知ること無し。  
  
先生が申された。命を知らねば君子となることは無い。禮を知らねば（世に出てその身を）立てることは無い。言を知らねば人を知ることは無い。  
この章は漢代の諸テキストのなかで、魯論語にはなく、本当に孔子の言葉であるか、疑いがあるが、論語をしめくくるには適切この上もないと吉川先生。■　命を吉川先生は、使命と運命といふ二つにして一つ、一つにして二つ、人間の行動の原理であり人間の行動を制約するものという観点からご覧になられた。徂徠先生は、命を天より稟（う）く、その傳ふるところ先王の道なるを以てなり。是その大なるものにして、吉凶禍福はいふを待たざるなり、とする。使命と運命との二面を言ふが、天の命を稟けて世を治める王と君命を以て悦びとする臣との違いを明確に分けている。昭和と江戸、生きた世が異なることにもよろう。いづれにせよ、この言葉は[学而第一](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)の「學びて時に之を習ふ、また、説からずや。朋有りて遠方より來る、また、樂からずや。人知らざるも慍みず、また君子ならずや」の君子と対をなすものである。その意味で政に限定されず、もっと広い世界、人間のありかたの中で考察さるべきと吉川先生はされたのであろう。「人知らざるも慍みず」といふは、[憲問篇37](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc))「天を怨みず人を尤めず。下學して上達す。我を知るは其れ天か」にも通じる。天より授かった己自身を生きる、それは王であろうが士であろうが、君子たるべき者の求むべき姿、在り方の基本である。■　不知禮無以立也　己の命を生きようとする志があっても、禮、人間社会を成り立たしめる原理、人間らしく生きるための約束事、これを知らねば世に出て身を立てることはできない。冠婚葬祭といふ慣習、制度や法のこと。■　不知言無以知人也　それは学習、学びて習う、下學して上達するといふ過程を経ずしては、己一人で勝手に習得できるものではない。学んで己を高めることは重要だが、更に重要なことがある。「人の己を知らざるを患へざる。人を知らざるを患ふなり。」人間社会を生きるには父母兄弟、師、友に学び、相手を知ることができねばならない。相手を知ろうとせず、相手から知られたいといふことでは、相手があなたに何を求めているかを知らずして、どうして命を受けることができようか。

読書会：[2010年8月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年８月７日)